

Nāgārjuna 作 *Bodhicittavivarana* について

——菩提心句の解釈における心の問題——

吉 水 千 鶴 子

Nāgārjuna 作 *Bodhicittavivarana* について

——菩提心句の解釈における心の問題——

吉 水 千 鶴 子

*Bodhicittavivarana*¹⁾ (以下 **BV.**) の主題である菩提心句²⁾ の位置づけと意味については、「菩提心偈に関する一考察」と題する極めて明解な論文が既に20年前生井智紹氏によって公けにされている。前の印仏学会の発表時に、日頃の不注意からその存在に気づかなかったことは氏に対して失礼であったばかりでなく、私にとっても大きな損失であった。菩提心句の形成過程、『大日経』との関係については必ず氏の御論文を参照されたい。また近年、**BV.** の真作問題をめぐって Ch. Lindtner, C. Dragonetti らの間で議論が活発であるが、生井氏の論証から見ても **BV.** が8世紀以後の著作であることは明らかであろう。このような前提に立った上で、ここで私は主に私自身の問題意識に従って、**BV.** の特質を更に明確にしたいと思う。

まずは主題である菩提心句を示そう。

dngos po thams cad dang bral ba // phung po khamdang skye mched dang*//
gzung dang 'dzin pa mam par spangs pa // chos bdag med par* mnyam nyid pas //
rang sems gdog nas ma skyes pa // stong pa nyid kyi rang bzhin no //

* BVa (1): kyi * BVa (1): pas

自心は一切事物を離れ、蘊界処と所取・能取を断じ、法無我と平等性であるが故に本不生であり、空性を自性とするものである。

菩提心句はその原型を『大日経』住心品にもち、やがて定型句となって『大日経』の儀軌類、そして *Guhyasamājantra* 第2章に現われる。

sarvabhāva-vigatam skandhadhātuvāyatanagrāhagrāhyavarjitam /
dharmanairātmyasamatayā svacittam ādyanutpannam sūnyatābhāvam //

(ed. by Matsunaga. p. 10)

故に註釈者 Smṛti. は **BV.** の主題を「Nāgārjuna が *Guhyasamāja* のうちから、中観の見としてまとめた勝義と世俗の菩提心である」といい³⁾、後世チベットでは **BV.** を、波羅蜜乗と金剛乗が無我の教説においては一致していることの教証

として用いる⁴⁾。しかしながらそれによって直ちに、**BV.** は顕教と密教を統一せんとする目的で書かれたと理解するのは適切ではない。むしろ当時(7~8世紀)、顕教、密教を問わず共通のテーマであった「菩提心」を中観思想によって定義づけることが **BV.** の目的であったと考えられる。**BV.** の思想的背景には、『大日経』の「如実知自心」、「菩提心清浄」の教説と、Śāntarakṣita, Kamalaśīla の教判哲学がある。この時代に、**BV.** とほぼ同内容の Kamalaśīla 作とされる *Bodhicittabhavana* 等、幾つかの「菩提心修習論書」⁵⁾ が作られていること、主にタントラの註釈者達によって Nāgārjuna 等の中観論師の名が名のられたことは、この背景と密接な関係にある。あらゆる大乘思想の中で中観思想が最も勝れたものであるという評価は Śāntarakṣita によって決定的となった。それがそのまま密教の通念ともなったのである。**BV.** は密教の論ではないが、菩提心を主題とする。菩提心を中観思想によって定義づける場合、最も大きな問題となるのは何であろうか。それは「心」をどう扱うかということである。菩提心とは他ならぬ「心」である。Śāntarakṣita, Kamalaśīla の論によれば、「心」とは常に瑜伽行派の説く「唯心」と考えられ、中観の立場からは否定されるべきものであった。**BV.** ははっきりとこの姿勢を継承している。つまり **BV.** の真の狙いは、菩提心というものは瑜伽行派の説く唯心では決してなく、必ず中観の教義に従って理解されねばならないと唱えることにあったのである。唯識と中観の相違を踏まえ、後者の立場から前者をはっきりと批判するという態度は、『大日経』や、やはり Nāgārjuna の名による *Pañcakrama* 等のタントラ論典には見られない。それでは以下、『大日経』と比較しながら、**BV.** の菩提心解釈を見ていくことにしよう。

菩提心句は自心観察の次第として次の五段階に分けられるが、それを **BV.** と『大日経』はそれぞれ I, II の如く解釈する。

- (1) sarvabhāva-vigatam. (2) skandhadhātuvāyatanagrāhyagrāhakavarjitam /
- (3) dharmanairātmyasamatayā (4) svacittam ādyanutpannam.
- (5) sūnyatābhāvam //

I. BVa (4), 455a⁵⁻⁸

- (1) 外道の見解を破る (BV., vv. 49- 9)
- (2) 有部と経量部の見解を破る (BV., vv. 10-25)
- (3) 唯識派の見解を破る (BV., vv. 26-45)
- (4), (5) 中観派の見解を証明する (BV., vv. 46-72)

II. 『大日経』如来出生大曼荼羅加持品⁶⁾ (P. No. 126, 221b⁴-221b⁸)

自心は、(1) 外道の説く ātman 等ではない (唯識無我を悟り、小乗へ入る)、(2) 小乗の説く蘊等ではない (法無我を悟り、大乘へ入る)、(3) 法無我と等しく無我であると知り、(4) 本不生・不可得であると知り、(5) 空性を本性とすると知る (真言道を通じて空性を悟る)。

『大日経』においても「心は本性空である」と悟るが、それは真言道によるのであり、大乘の中で唯識説と中観説の思想的対立は問題とされない。BV. は唯識説に関して、その三性説、アーラヤ識転依、自証知を順次批判するが (vv. 28~40)、その後それらをまとめて次のように述べる (vv. 41~46, BVa (1), 44b⁷~44a⁸)。

内或いは外或いは両者の間に勝者たちの心は得られない。それ故心は幻を自性とするのである (v. 41)。色、形による区別或いは所取、能取或いは男、女、中性などといった性質に心は住するのではない (v. 42)。つまり諸仏が御覧にならなかったし、これからも御覧にならないであろう、無自性を自性とするもの (心) をどのようにして (現在) 御覧になろうか (v. 43)。実在 (bhāva) (として唯心派によって立てられた自内証の知) といわれるのも分別である。分別がないことが空である。分別が顕われるところに空性はどうしてあろうか (v. 44)。知られるもの、知るものという形象をもった心は如来たちによって御覧になられていない。知られるものと知るものがあるところに菩提はない (v. 45)。無相、不生、非有であり、言葉の道を離れた虚空と菩提心と菩提とは無二という相をもつものである (v. 46)。

(⁷) は BVa (4) による。

心の無自性・空性を悟る智が勝義の菩提心である。Smṛti. は菩提心とは無分別智、菩提とは諸法を顛倒なく現観することであると解釈する⁷⁾。空性の智とは実体がないが故に虚空の如くである。従って「虚空と菩提心と菩提とは無二の相をもつ」という。そしてこの BV. の記述は実は『大日経』の住心品に基づいていることを見ておかねばならない (P. No. 126, 117b⁴-118a⁴, BVb., 49b⁶-50a¹, 50a⁸-50b¹)。

秘密主よ、菩提と一切智性とは自心より求めるべきである。なぜならばこの心は自性清浄であるから。それは内にも無く、外にも無く、両者の間にも観られないのである。秘密主よ、心は如来、阿羅漢、正等覺者たちによって御覧になられなかったし、[これからも] 御覧になられないであろう。そして [心は] 青に [住するの] ではなく、黄に、赤に、白に、紅葉に、水晶の色に [住するの] でもない。短にではなく、長にではなく、…… (中略)。秘密主よ、この心は眼に住さず、耳鼻舌身意に住さない。なぜかというならば、この心は虚空を相とし、それ故に分別と妄分別のすべてを離れている。なぜかというならば虚空の自性、それが心の自性に他ならないからである。心の自性とは即ち

菩提の自性である。即ち秘密主よ、このように心と虚空界とこの菩提とは無二であり、二とされたものとして無いのである。

このように両者の記述の類似は明らかである。しかしながらその意味するところは必ずしも一致していないように私には思われる。『大日経』では心の如実相としての自性清浄が菩提の前提となっている。故に清浄なる自性においては心と菩提とは無二なのである。『大日経』の浄菩提心思想は、如来蔵思想における「自性清浄心」を継承したものといえるが、その観点から見ると、「心は空性を自性とする」という菩提心句も、心を否定し去るものではなく、心の清浄なる真のあり方を説いたものと解釈されよう。一方の BV. は決して心の自性清浄を説かない。心もまた蘊等の諸法と同じく因縁によるものであり、無自性であるという。それを悟る無分別智が菩提心なのである。『大日経』では「心と虚空と菩提」とが無二だと言い、BV. では「虚空と菩提心と菩提」が無二だという。ここで私は BV. が故意に「心」を「菩提心」と言い換えたような気がしてならない。BV. にとって「心」とは「唯心」を意味してしまうからである。そしてこのような BV. の説に、Śāntarakṣita, Kamalāsīla の多大なる影響が認められることは確かであろう。しかしながらなおひとつの疑問がある。それではなぜ BV. は離一多性による無自性性論証を用いないのか。おそらく答えは、これは Nāgārjuna の作であるから、であろう。Nāgārjuna が離一多性による無自性性論証を知っているはずがないからである。

以後 9~10 世紀にかけて、Nāgārjuna はタントラの分野で大いに活躍する。この BV. も聖者流の Nāgārjuna の手によるものである可能性は否定できない。しかしながら聖者流の Nāgārjuna は、唯識説をタントラ実践法の解釈にしばしば利用し、瑜伽行中観説によって「心もまた空である」と説いても、決して唯識説に批判的ではない。むしろ『大日経』の自性清浄心の思想を受け継いでいると言えよう。この点では BV. は特殊である。これは全くこの作者 Nāgārjuna 自身によるものか、それとも BV. がタントラの修習を論の中で扱わなかったためであろうか。タントラの修習の理論的根拠として唯識思想は不可欠であり、また時代の要請から自ら中観論師の名を名のったことにより、タントラ論書は多くの「心もまた空である」という曖昧な表現を用いた。いったいそれはいかなる意味なのか。ここでいつも私は立ちどまってしまう。この論もまた、この問題に関する私の足踏みにすぎないのである。

1) BV. には以下のテキストが存する。

BVa (1): *Byang chub sems kyi 'grel pa* (P. No. 2665)

Tr. Guṇākara, Rab zhi bshes gnyen

Rev. Kanakavarman, Nyi ma grags

BVa (2): *Byang chub sems kyi 'grel pa* (P. No. 5470)

Tr. Rab zhi chos kyi bshes gnyen, Gu rug chos kyi shes rab

BVa (3): 菩提心離相論 (大正 No. 1661)

施護訳

BVa (4): *Byang chub sems kyi 'grel pa'i rnam par bshad pa* (P. No. 2694)

A. & Tr. Smṛtijñānakīrti

BVb.: *Byang chub sems kyi 'grel pa* (P. No. 2666)

Tr. Jayānanda, mDo sde 'bar

このうち BVa (1), (2) は同本の異訳, (3) はそれに相当する漢訳, (4) は註釈である。BVb. は散文で書かれており、『大日経』住心品を引用しながら論を進め、内容的にも異なっている。ここでは BV. といえば BVa. を指し、BVa (1) をテキストとして使用する。

2) チベット訳はこれを偈として翻訳するが、*Guhyasamāja*. に見られる梵文が不規則な形のため、仮に句と呼ぶ。

3) BVa (4), 455b³⁻⁴.

4) Tsong kha pa, *Rim lnga rab tu gsal ba'i sgron me*, Ja, 49b²⁻³, The Collected Works of Tsong kha pa, Part II, New Delhi, 1978.

5) 生井氏論文による。また森山氏論文参照のこと。

6) 生井氏論文 pp. 33-34 参照。

7) BVa (4), 471b².

〈参考文献〉

生井衛「菩提心偈に関する一考察」、『密教文化』91号, S. 45。

森山清徹「Kamalaśīla の唯識思想と修道論」、『仏教大学人文学論集』第19号, S. 60。

N. Dutt, "Bodhisattva Pratimokṣa Sūtra", IHQ., vol. VII (1-2).

P. C. Bagchi, "Bodhicittavivarāṇa of Nāgārjuna", IHQ., vol. VII (3-4).

P. Patel, "Bodhicittavivarāṇa", IHQ., vol. VIII (3-4).

D. S. Ruegg, *The Literature of the Madhyamaka School of Philosophy in India*, Wiesbaden, 1981.

Ch. Lindtner, *Nagarjuniana*, Copenhagen, 1982 (BVa. の英訳を含む)。

Ch. Lindtner, "Adversaria Buddhica", WZKS., XXVI, 1982.

P. Williams, Review Article, JIP., XXII (1), 1984.

C. Dragonetti, "On Śuddhamati's Pratiyaśamutpādayakārikā and on Bodhicittavivarāṇa", WZKS., XXX, 1986.

〈キーワード〉 菩提心, Nāgārjuna, Bodhicittavivarāṇa

(東京大学大学院)